一九五五年
千曲會報
第五二号

昭和三十年十月三十日印刷
昭和三十年十月三十一日発行
編集兼発行人　信州大学繊維学部内　田口亮平
印刷人　上田市原町　中沢正
印刷所　中沢印刷株式会社
発行所　信大繊維学部内　社團法人千曲会

千曲会と母校とのつながり

井澤喜三

よくこんな言葉を聞く、「此頃は母校へ行つても知つた先生が居られないのでつまらない」と、私の勤めている蚕業講習所でも、舎監のO先生が丈夫の頃はよく古い卒業生が訪ねて来たり、時折外で卒業生に逢うと、O先生の消息を尋ね、在学当時のことなど非常になつかしそうに話し掛けて来た。O先生が亡くなられてからはそのようなことが少くなつて何となく淋しく感じる。

学校と卒業生とのつながり即ち師弟の関係も時代と共に変り、決して封建的な師弟関係を是認するわけではないが何となく学校は学生に学問を授け、一定の資格を与えて卒業させ、出来れば就職の心配でもしてやれば大出来だと言つたような、極端に云えば、卒業生の製造販売機関と言つたような考え方が多くなつたのではなかろうか。特に就職の問題は裏面はどうでも、一応は公開試験により、情実人事は段々行われないとか、繊維学部は出たがプロパーの繊維工業や蚕糸関係の門戸が狭く、教育関係その他の傍系に就職するものが沢山あるとかの事情から益々そうした考え方が多くなるのではなかろうか。社会の見方も伝統の浅い新制大学については就職率の良否を以つて評価の基準とするより外に仕方のないことにもよるであろう。

蚕糸専門学校が繊維専門学校になり、更に信州大学の一学部となつた歴史的過程には幾多の断層を生じ、教授陣の変遷が又一つの小断層となることは全く止むを得ないことではあるが、その断層の底には脈々として続く伝統がなければならない。この伝統を育み伝えるものは我々四千の千曲会員である。又信州大学は伝統の浅い寄集めの一新制大学ではあるが、繊維学部に関する限りこうした伝統を持つことを大きな誇りとしなければならない。しかし如何に輝かしい伝統を持つても、その伝統を基として更により良き現実を培つて行くのでなければ何の価値もない。戦前の日本が如何に立派な歴史を持ち続けて来たとしても、現実が醜い貧弱なものであつたならば何もならない。より良い日本を建設することにより、始めて過去の歴史が光輝あるものとなるのである。我繊維学部に於ても、光輝ある伝統の上に更に新しい歴史を作るものは現在の学部であり、学生であり、又千曲会員でなければならない。

その為には学校が単なる卒業生の製造販売機関であつてはならない。卒業生は商品ではない。血の通つた人間である。人間は人間同志の愛情によつて生まれ、育まれるものである。即ち学校と学生、学生相互、学校と卒業生、卒業生と学生、或は卒業生相互の有機的つながりによつて始めて人間的卒業生が生まれ、育まれる。そこに先生は先生として、学生は学生として、卒業生は卒業生としての生き甲斐もあり、張り合いもあり、学部の発展も期し得られる。

全職員学生を含めた学校と全同窓生とのつながりをより緊密にすることによつて、学校の歴史の断層を埋めなければならない。それが千曲会の使命であり、それによつて同窓精神も昂揚されるのである。お互同志話し合い、よく知り合うことが出来れば、同窓以外の職員の中に、千曲会の単なる事務的会合にも神経を尖らす人があるなどと云うことは有り得ない筈である。又千曲会員としても現在母校にはどんな先生が居られ、どのような研究をされているか全然知らないと言うようでも困る学部の発展を希望する気持は同窓であろうと、学校の職員であろうと変りがない。我国の数百の大学のうちで最も特徴ある学部として発展する為には学校と千曲会とが緊密なつながりを持つて、新しい伝統を培つて行かなければならない。人夫々意見の相違はあつてもお互に話し合い認識し

(二頁下段へ続く)

同窓精神昂揚
学内懇談会

去る四月東京に於て開催された支会長会議の席上で決議された同窓精神昂揚運動に応じて、千曲会学内懇談会が七月十二日に会員四十名余の出席を得て開かれ、今後の千曲会の在り方について種々活潑な議論が交換された。

先ず野口理事長がこの運動の概略について説明し、その一翼として千曲会本部としては、一、名簿を完備すること二、千曲会報の内容を充実せしめて発行回数の増加を企ること、三、個々の千曲会員の福祉の増進のため就職斡旋等に努力を傾注することなどが提唱され、どうしたら千曲会は会員にとつて魅力ある会となり得るか、大多数の会員の千曲会として伸び行くことが出来るか、ということについて懇談したい旨の発言があつて会は進められた。

理事長の言を要するに、往年の千曲会は連絡がよくとれていて、会員の熱意も高く、すぐれた同窓会であつたが、現在に於ては会員の三分の一が会費を納入する程度であつて、熱意も落ち、無気力な状態にあるから、その原因を究明して往年の如き会に戻したいというものである。

蒲生顧問は会員の母校を愛する情に欠く所が多いと嘆き特に学内同窓は千曲会活動の中枢であるのだから協力して有形無形に千曲会を盛ならしめるように努力することが肝要で、それが母校の発展に寄与する道であることを強調し全会員の団結が直接間接に全員の益となつて、会活動の強化に伸展する道に至るものであると述べた。

これらに対し若い会員から現在の千曲会は少数の年長者の為に左右される如き感があり、往年の千曲会は清新潑剌であつたと嘆かれるが現在の衰退の原因を究明せずして、徒らに昂揚運動を強調しても単なる机上のプランに終る公算が大きい。基礎的な究明を経ず、その上の対策を望むことは無理であるという意見が述べられた。

それを契機として種々論議が斗わたせれが、役員側の言わんとする所は、千曲会の衰退は種々原因もあろうが、一番の点は個々の会員に千曲会というものが直接的に益することが少いから魅力を失い無関心となる点が多いと思われるから、その点に会活動の中心をもつて行き、会員の就職斡旋等には特に力を注ぎその方面に業績を挙げるならば必ずもつと多数全員の関心を呼び戻すことが出来るであろうというのである。

その外に、千曲会は会費の納入する会員だけの同窓会でよいではないか、出身科別の部会を作り支会と並行して活動を行い、その上に千曲会があるという組織にしたらどうか、学内教官の積極的協力が得られる組織を作つたらどうか、等の意見が出た。

結局千曲会衰退の原因を熟知し、その上に根本的な対策を求めなくては、この運動は竜頭蛇尾に終るのではないかということが明かになつたようで、有益な意見が多々開陳され、学内同窓の関心を高めるためにも又年長者と年少者との意見の相違を知る為にも極めて有意義であつた。

特別活動資金設定について

理事　中島　暹

本紙前号に於て同窓精神昂揚運動展開の論説が掲げられたが、同窓会である千曲会が如何に萎微沈滞の傾向にあるかは会費納入者が新入会員を除けば一割に満たないことでも推察される。凡そ同窓会の盛衰はその会費の納入状況によつて或程度判断できるものであるが、群馬大学工学部即ち桐生高工では三割五分の納入率であり山形大学工学部である米沢高工は七割五分の納入を目標に進んでいる。然るに本会は一割未満であつて一部卒業生のみの千曲会に見られても已むを得ないことで同窓会の目的である会員相互の親睦や共存共栄の実が地に落ちていると看做されても過言ではないであろう。往年の面影を偲ぶとき少からず寂寥を感ぜざるを得ないものがある少しでも母校や同窓会を想うならば同窓精神昂揚を叫ぶのも理の当然と頷ける。

然しすべてかけ声だけでは成り立たないばかりでなく折角の熱情も長続きはしない。どこまでもその情熱を持続発展させるためにはそれだけの内容をもちそれにふさわしい実が伴わねばならない。その内容即ち実があつてこそ、それが魅力となつてはじめて全きを得るものである。

そもそも本会が斯様に頽勢にあるのは敗戦後の社会情勢を始め本会自体の組織運営方法等々に原因はあろうが何んと云つてもその魅力に欠けていることが最大のものと思われる。

去る四月の支会長会議に特別活動資金設定の決議がなされた趣旨もここにある。

然らばこの魅力をもつためにはどうしたらよいか、おざなりの仕事では効きめがないそこで従来の仕事以外に中途半端に放置されてあつた会員の就職斡旋を始めその他会及び会員の発展向上を図るために積極的な活動を起す必要がある。又場合によれば会員の事業経営や技術面へのサービス等も考えられる。又早晩実施することになると思われる母校の五十周年記念行事などにも大いに協力する等これ等を強力に推進してこそ会員の共存共栄の実もあがつておのずと母校並びに本会に対する関心も深まることであろう。

然しあれもこれもと一時に抱え込んでも虻蜂とらずじまいに終るおそれもあるので先ず

会員の就職斡旋を軌道に乗せること。

が取上げられたのである。この意味する処は単に失業者を救うばかりでなく広い意味に於ける就職斡旋を行うことであつて大都会に活躍する者各種の軋轢の間に生きる者や何等かの事情によつて失職した者等にとつてはこのたびの計画は旱天に慈雨の感があると思われる。反面温床に育つ者や順風に帆をあげ順調に進んでいる者にはさしてぴんと来ないどころかその目的に疑惑をかこち不分明を訴えることと思われる節もあるが、現在の如く日帰りの旅費にもことと欠く状態では何もできないことは火を見るより明かである。卑近の例として最も斡旋し易い新卒について見てもどうやら一〇〇％近い就職ができるのもその旅費が曲りなりにもある程度工面ができるからであつて純然たる旅費だけで一名当約三〇〇〇円を必要としこれに人件費、印刷費、通信費等を加えるならば相当の金高となり、何事も財源があつて始めて活潑に動き得る訳である。

この外これと同様に特別資金を募集して必ず実施しなければならない仕事として前にも述べた母校の五十周年記念行事に参画することがあると思われるが若しそうだとするならば今よりある程度の目安を樹てて準備する必要がありそれがためには二度の寄付行為に伴う二重の費用と煩を避けてこのたびの活動資金も記念行事の中へ折込んで募集することが至当と思われるがこれは総会の議を経ねばならない。

特定の一部有力者のみから頂くことも考えられるが以上に必要なこの活動資金はお互同クラスの一員に失業者が出た場合のことを想い又母校の発展を願うならば卒業年次を問わず全会員が負うべき性質のものであり又この使途については就職斡旋費にしても母校記念行事へ折込むならばこれと就職斡旋費との割振から醵出金額に応じある程度各科へ按分し使用することを考慮する等慎重を期さねばならないことは云うまでもない。

勿論会費の納入についても極力促進を図らねばならないが会費は会費としての使途があり、例えば会報の発行であるが現在のように年三回位では無きに勝る体のものであつて、月刊とまでゆかなくとも第三種郵便物になり得る程度までは漕ぎつけねばならない又会費の値上げを叫ぶ向もあるが会費納入率を少くとも三割以上に引上げてからのことと思われる。

兎もあれこの特別活動資金が諸兄の心からなる御理解によつて御賛同御協力を得て設定ができるならば同窓精神昂揚の基礎となつて本会の発展は期して待つべきものがあると信ずる。

（一頁より）

合うことによつてどのようにも調整出来るものである。又意見の対立は、これを検討し合う過程を通じてお互を理解するきつかけともなる。決して現在こうしたつながりが緊密でないと言うのではないが千曲会員の中に学校へ行つても知らない先生許りでつまらないと考える人があるとか、新に見えられた先生は全然卒業生のことを知らないとか言うことでは必しもこの間のつながりが緊密だとは言えない今後もつとこのつながりを密にし、数ある大学のうちでも最も特徴のある学部とすることが千曲会の大きな使命の一つではなかろうか。

（蚕一六回、千曲会上小支部長蚕試上田支場長）

◇　◇

茨城支会だより

東京に於ける支会長会議で本会刷新を目標とする同窓精神昂揚運動展開の件が決議されたのでこれを会員に徹底するように、尚各種の都合で昭和二十九年度は総会が開催されなかつたので今年は是非にと云う声もあつたので去る十月十六日水戸芝田屋旅館で楽しい一日を送ることが出来た訳です。

出席者は船後（蚕五）木間（糸八）丸山（蚕一二）前沢（蚕一四）加藤（蚕一九）竹内（蚕一九）堀川（蚕二〇）渡辺（蚕二二）生天目（蚕二五）谷沢（蚕二六）塩入（蚕三〇）米川（蚕三三）影山（蚕三三）永井（化四）大工原（蚕三六）宮崎（糸三八）金井（蚕大三）の以上十七名であつた。

先ず船後支会長より挨拶があり、会員相互の連絡強化の件、懇親団結の件について話があり、相協力して母校及本会の今後の発展をはかりたい旨を述べられ続いて前沢副支会長より経過報告があり特に前述の同窓精神の昂揚の件については詳細に説明報告があつた。会員は誰も異句同音双手を挙げてこの運動に讃成した。とかく戦後の混乱は時代の情勢で意気沈滞の感がなかつたとは思われない点もあるので誠に当を得た掛声である要は今後会員の胸三寸にあり責任は重且つ大なるものがある

次に協議に入り

一、同窓精神昂揚運動の徹底及茨城支会発展の強化策の件

二、会員の自己紹介の件

三、全会員の動静調査の件

四、本部よりの要請である会報配布の件（引受ける）

五、過年度分千曲会費納入の件

六、次期総会開催の場所と期日の件

七、その他

午後一時協議終了、昼食宴たけなはとなるつれて大声も出る。懐つかしい校歌も聞えて昔思い出の学生時代の話社会問題、大先輩の子供達の自慢話等々会場は煙草の煙と張切つた大演舌会で騒然たる一時もあつた。とにかく新旧会員が遠慮なく懇談して和気あい〳〵の内に時の経つのも忘れ午後四時盛大に終了、母校の発展と会員の健康を祝して西に東に希望を抱いて会場を去つた。

盛大なる學部祭

十月二十一日より二十三日迄

澄みきつた青い空。赤とんぼがスイスイと北に向つて飛び去つて行くことをみつけた。それなのに絶えることなく次々と飛び来る。

鳥帽子山もすつかりお化粧がすんだ。色とりどりに。

のどかな秋の三日間賑やかに繊維学部祭が開かれた。名物の前夜祭は今年も行われ上田の町の夜空になつかしい太鼓の音を聞いた。長い年続いてきた「パツパ」の音を。

この三日間学内解放も行われ各科毎にそれぞれ特長を生かした展覧会が催され標本、説明図、実験設備等が展示され仲々盛大であつた。

この外写真、美術、書道展も催されたが学生の作品もさることながら職員の絵心筆心もなかなかのもので八木教授小山講師の洋画、古里助教授の「ローケツ染」、光画クラブ諸氏の写真等見る人の目を楽しませてくれた。

二十一日には映画「白鳥の湖」外、二十二日は演劇班による「夕鶴」の上演、二十三日は運動会が行われた。

昔は「専門の運動会」といわれ重箱下げて近所の村々からも、町からもやつて来た。今年もやつてきた。

「繊維学部の運動会」に珍芸・珍競技がとび出して拍手喝采。

足並み早い秋の陽の小牧山に沈む頃賑やかな運動会は、学部祭は幕を閉じた。

蠶糸業と絹に關する講演會開催さる

日本蚕糸学会中部支部主催の蚕糸業と絹に関する講演とシンポジウムが去る七月二十三、四両日母校で開かれた。

初日は午前十時から正午まで農林省蚕糸局長塩見友之助氏（ソ連農業視察について）日本蚕糸学会々長横山忠雄氏（フランス及びイタリアに於ける蚕糸研究事情）の講演があり引きつゞいて午後は「蚕業試験場に何を望むか」について大日本蚕糸学会理事早川卓郎氏（地方蚕業試験場の生い立ちと現況）外五氏の講演後討議を行い終了後上山田温泉清風園に於いて懇親晩餐会が行われた。

二日目は絹を中心とする蛋白質高分子に関するシンポジウムが行われ午前九時より蚕糸試験場清水正徳氏（絹フィブロイン及びセリシンの結晶構造）外二氏の講演が行はれ、午後一時よりは東北大学教授志村憲助氏（絹糸蛋白質の生体内合成機構）外三氏の講演があり、討論講演として十氏の講演を行い信州大学長佐藤武雄氏が閉会の挨拶後全員によるガーデン、ビーヤ、パーティがあり二日間にわたる討論会の幕を閉じた。

千曲會定期總會について

総会開催について十月二十一日付で各支部長宛左記の通りの通知が出ておりますから御了承の上一般会員の方々もお誘い合せの上多数御来会下さい。

尚木部提出議題の中の母校創立五十周年記念事業としては母校五十年史編纂・繊維展覧会・学術講演会・記念式典（記念式・記念祝賀会・功労者表彰・物故職員及同窓追悼法要）・記念厚生部創設（特別活動資金によるもの）等のことが考えられておりますので御参考までに申し添えます

第十六回定期總会開会の件

第十六回本会定期総会を開会致します。左記御諒承の上貴支会代議員出席方御手配下さるよう御通知旁々御依頼申上げます。

追つて貴支会より御提案がありましたら来る十一月十五日迄に本会へ御通知下さい。

尚代議員出席不可能の場合は別紙委任状へ署名捺印の上御回送下さい。

記

一、期日　十一月二十三日午前十時（勤労感謝の日）

一、会場　信州大学繊維学部会議室

一、本会の提案

(イ)昭和二十九年度収支決算の件

(ロ)昭和三十一年度収支予算の件

(ハ)事業報告の件

(ニ)賛助会員推挙の件

(ホ)本会の活動強化に関する件

(ヘ)母校創立五十周年記念事業に関する件

総会終了後懇親会を会費三百円位で開催します。

役員会開催の件

十一月二十三日総会開催前の午前九時より千曲会館に於て役員会を開会致しますので役員の方は御出席お願いします

北野三郎氏十年前の追憶を語る

朝日新聞（八月十四日付）三河版に氏の当時の追憶記事が出ておりましたので紹介します。氏は紡織科第十四回の卒業生で現在日清紡戸崎工場勤労課長をしておられます。

同氏は昭和十八年日清紡から南方建設隊員としてフイリツピンに渡り約一年マニラ工場に勤務、十九年に現地召集にてスビク湾オロンガ守備隊にいたところアメリカ軍が上陸し貫通銃創をおい意識不明のところ捕虜となつた。米本国に送られドイツ人捕虜に混つて唯一人の日本人として毎日を送つて居つたのである。氏は当時の模様をこう語つています。

「サンフランシスコ港沖のエンゼル・アイランドに収容されておりまして広島の原爆を知りソ連の参戦をも知りました。現在手元にある唯一の記念品サンフランシスコ・イクザミナー紙のトルーマンはビクトリーを宣言したとありその〝ビクトリー〟が赤字で印刷してあるのが印象的です。

と申しますのもフイリツピンの山の中を逃げ廻つたり随分つらい思いをし、又アメリカに捕えられてから彼の物量にも圧倒感を抱かせられましたが一るの希望は持つていたのにこの決定的な宣言を受けた時はなんとも言えぬ淋しい気持を味わいました。

然し捕虜に対する待遇は全く立派でした。色々思い出はありますが戦争は全くいやです。」

湯原諄氏再び渡印に決定

本校元教授湯原諄氏にはさきに印度に渡られ現地の繊維産業技術振興に偉大な貢献をされ帰国されておりましたが今回再び印度アツサム州政府の招聘により本年十一月より二ケ年間次の任務を帯びてアツサム州シロン（Shillong Assam Gov.）に向われることになりました。予定される仕事は

(1) Industrial Institute 並びに Home Industryの development

(2) Wild Silk (Tassa, muga, erisilk) の紡績並びに織物工場（規模三〇〇〇錘）の建設

(3) 其他関係産業の技術指導

今回で二度目の渡印だけに現地の諸情勢に精通されておられる同氏の活躍は大いに期待し得るものと考えられます同窓各位と共に同氏の御健康と御発展とを切に祈つて止まない。

製糸科三三回卒 坂西廣氏に醫學博士の學位授與さる

坂西氏（二九才）は長野市に故郷を有し、昭和十八年に上田蚕糸専門学校製糸科に入学、

（四面下段へつゞく）

技術者と工業經營

宮坂正治

汽車の旅の退屈なるまゝに前の席の人に話しかけてみたするとその人は、F工業会社の工場長さんであつた。

色々工場経営についての有益な体験談を親切に話してくれた。最後に「私のような商業系統出身のものは、工場長をしていても、技術面に暗いので大変苦労しています。これからの長たるものゝ資格は技術と経営の知識を兼ねもつている。Semi-Engineer なることですね。」と言われた。間もなくして、その人はK駅で別れを告げて下車された。

この最後の言葉が、今でも何だか脳裡に残つていて忘れられない。記憶を新たにしていま、この言葉の意味するところを少し考えてみよう。

今日まで、工業技術の、そしてその技術者の、経済発展への寄与の大きいことは、今更いうまでもなかろう。技術者は、これまで常に地道に、自然科学者達の実験室の中での新結果が、陽の目をみるまでの橋渡しをなし、生産力発展に大いに尽してきている。もう少し詳しく言えば、まず学者が実験室で、時間と労力と材料費とがいくらかゝろうとは無関係に、種々実験し研究して、その中から新しい法則や結果を発見するのである従つてその業績も、なかには折角長い月日と莫大な費用を投じて行つたものも、事の次第によつては、社会への応用をまたずして埋もれてしまうものもあろう。しかし、このような場合、技術者は経営家とともに、この折角の新結果に、出来るだけ陽の目をみさせようと努力してきたと言えよう。

ところで、かゝる場合、古い企業家は、たゞ只管利潤を得んがために、技術者に、最小限の自然力と物資とを費して最大の能率のあがるような最善の方法を選んで橋渡しをするよう要請したのである。

徒つて技術者は技術そのものにのみ力を注ぎ、他の面は顧みなかつたし、またその必要も感じなかつた。

ところが、新しい企業家の経営目的は大変異つてきているように見受けられる。それは広義の経営体全体の健全な発達を願つているのである。すなわち、その新結果の工業化が、一つには一般消費者大衆にとつて、効力の面からも経済的な面からも喜んで受けとられるように、つぎには、それの生産に当り経営内で働く労働者はよりよい待遇がなし得られるように、最後には出資者にもよりよい配当が提供出来るようにと願つているのである。

されば、新結果を、実験室から現実社会への利用へと移すに際し、技術者の橋渡しの仕方も、またその考えも、おのずから前の場合とは非常に異つてこなければならぬと言えよう。

というのは、まず第一の条件を充たすには、消費者の需要に関する一般的知識をもつたり、或は消費者に、新たな要求を喚起し、より新たな生産品に対する需要を惹起せんとする積極的な活動を必要とするからであり、また、あと二つの条件を充たすためには原料から製品となるまでの生産費を償つた上に、利潤を齎すような価格で売らなければならない。それには、技術面や商業面、更に管理全体の費用について熟知し、いかなる方面にいかなる部分に節約を施し得るか、施さねばならぬか、ヨリよい作業方法や統制方法はないかなどと考え、就中、賃銀の高さについては、それが直接、労働者の生活に大きく響くものだけに、格別慎重な考慮を払わなければならぬからである。

しかも、技術は時の経るとともに、単純なものから、複雑多岐なものへと進歩してきているので、純然たる商業系統の人には、とても技術面の諸操作に、手が出せないような事情にある。

従つて、もはや、技術者と雖も、単に技術それ自体のみの知識に頼つていてはおれないし、また孤立的に技術のみに取組んでばかりしてはおれない。必ずや、他の経営経済部面の一応の知識を必要としそうした部門の人々から、協力を要請されるのである。

くどくなるようであるが、具体的な一例に、商業系統の人にとつて重要な任務の一つ会計事務、そのうちの正しい貸借対照表の作成というものをとろう。この作成には簿記会計上の知識のほかに、更に幾多の技術並びに自然科学に関する細目の知識を必要とする。それらの知識がなかつたならば、その作成に際し、固定或は流動資本材の正しい評価は到底不可能であろう。それ故、大いに、簿記会計の大綱に一応通ずる技術者の協力を得なければならぬのである

かく考えてくると、新しき時代の要請にこたえ得る新しい技術者というものは、技術と工業経営経済の知識を兼備する人を指していうのではなかろうか。

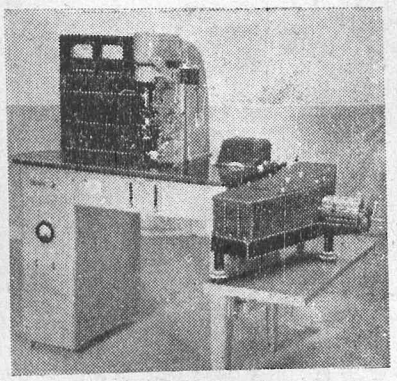
いまや、時代は世界史的にみて、近代資本主義の高度に発展した段階にきていると言えよう。これをK・マルクスは独占資本家の支配する社会だと予言した。しかし、J・バーナムは、事実はこのK・マルクスの予言に反し、直接生産課程の技術的な指揮と調整を行つているもの、すなわち技術者からなる生産管理者をして、支配的地位に立たしめつゝある社会だと言つている。我国に於て、かれらのうち、いずれがその真実を衝いているか、今は問うまい。ともあれ、車中の工場長さんの言われた Semi-Engineer の地位の高まりつゝあり、その役割の重要性の増しつゝあることは、これまで述べてきたように観察し考察すると、否めない事実のように思われる。

さて、この考えは、余りにも自分の田に水を引き過ぎた感がなくもない。次の機会に更に再考することにして、この辺でひとまず筆を擱こう。

（一九五五・一〇・二五）

（本学部工業経営教官）

◇　◇



顯微分光測光器設備さる

機関研究費で購入された大物の一つで、国産の第一号オリンパス光学の製品。

用途は主として試料の顕微鏡的な（数ミクロンの）微小部分に単色光を入射させて顕微鏡像を観察又は撮影すると共に、試料を透過してくる単色光の波長を可視部から紫外光まで変えて試料の各波長に対する吸収曲線を求めるもので、装置の主要部分は、光源の水銀燈、石英プリズムを二段に使つたモノクロメーター、反射対物レンズを用いた顕微鏡部分、バイパス光路、光電流の増巾装置等であつて、吸収率はバイパスを通した光と、試料を透過した光との強さの比で求めることが出来る様になつている。物質の微小部分の性質や各種溶液の濃度の測定、其他広く各方面の研究に有効に利用される日が期待されている。（目下オリンパス光学で再調整を実施中）

（三面下段より）

たまたま大東亜戦争たけなわのの折にも拘らず悪条件を克服され学業に専念され、昭和二十年九月に卒業、翌年四月新潟医科大学に入学、日頃温厚篤実な同氏の風格によくマッチした学業だけに殊更熱心に医学の道を学ばれ、同校卒業後もひきつゞき大学精神科に籍をおかれて研鑽され努力の甲斐が実をむすび、本年五月論文審査に合格され医学博士の学位号が授与されたわけであります。同氏の論文は「脱水素酵素系より見た脳組織代謝の研究」（第一、基礎実験、第二臨床実験）と副論文の「脳における刺戟反応型式」とであり、若冠二十九才の若手研究者として今後の研究を大いに嘱望されている。

回顧

糸三　高木三治

四十年前の上田町は真田昌幸の築城当時の町造りのままの城下町で、町に四ツ辻と云うものが殆んどなく何処へ行くにも突当つて曲らなければ行かれなかつた。十字路は郵便局の角位のものだつたかも知れない。交通機関もまた頗る幼稚で町の中は人力車、別所へ行くには馬車、バスもなく電車もないと云う人口二万の小都会であつた。

この田舎の町へ当時勃興期にあつた蚕糸業の最高学府として上田蚕糸専門学校が設置されたので上田町としては大きな誇りであり又長野県の誇りでさえもあつた。当時は蚕専と云えば先生も生徒も一般と違つた人間のように見られ

学生はズーズー弁も居れば オイドンも居ると云う文字通りの全国的の学校であつた。

大正二年に三期生が入り一年から三年まで生徒が全部揃つたので其の秋盛大な開校式が挙行され上田町も協賛会を作り学校の開校式なのか上田町の祭典なのか判らないような御祭り騒ぎを演じ、常田獅子も出る房山獅子も出る。学校を開放し展覧会や記念運動会を催し何日かを過ごした。

斯かる雰囲気の中で生徒は我校の校風は我々の手で作るのだと云う強い誇りと責任とを感じて大いに張りきつて居た。開校当時の生徒の中には相当年をとつた者も多く立派な口髭を生やして居たので若い生徒も之を真似て一時口髭が大部流行したが、中には余りに薄くて写真によく写らないので消炭を塗つてよく写つたと喜んで持ち廻つた茶目も居た。当時口髭は学校でも無関心であつたが頭髪を分け油をつける事が喜ばれなかつたためか紺飛白の着物に縞の袴をはき坊主頭に口髭を生やし太いステッキを振り廻して町中をのし歩いたのなど今から見れば誠に嘆飯ものだが御当人は得々として居たのだから呆れる。袴と云えば当時の寮生は外出の際は必ず制服制帽かさもなくば袴着用と云うことになつて居たので一町位離れた町の洗湯へ行くのに袴をはいて石鹸を持つて行つた。

然しこうした中でも生徒はよく勉強したように思う。高等数学や物理の充分判らない中に機械工学や応用力学と云うような講義を聞かされたので勉強しないと判らなかつたせいもあつたろうが。

当時の先生は大学出たての若い先生が多く専門学校の生徒にどの位むずかしい講義をしたらよいのかも判らなかつたのかも知れない。或る先生は講義のノートもなく原書を数冊教室へ持ち込んでシオリのある所をあちらこちら開き乍らボツリ〳〵と或る時は早く或る時はゆつくりと講義をされたが何を云うて居られるのか一向に判らず、帰つてノートを読んでも判らないので参考書を買つて来て辛うじて判つたこともあつた。御者前を書いては失礼ではあるが原田先生の数学は判りにくい所を判るように講義して下さつたので充分判つた積りで喜んで放つて置いたら最初の中の呑み込み方が不充分だつたのか一ヶ月も経つとだん〳〵判らなくなつて之は大変だと試験勉強以上に苦しい勉強をした。針塚校長の和魂独裁主義は確かに当時の校風の基礎となつて居たように思う。一期生などは入学早々から毎日畑へ追い出され畦を作り桑を植え蚕かつぎまでさせられ実践躬行を強いられたことが癪て製糸科の卒業生が工場に歓迎された原因ともなつたでしょう。此の和魂独裁の和魂が具体的に何を指して居たのか知らないが毎年稲穂古が始まると毎朝早くから校長先生、和田先生と云うような先生方が出られて我々を鼓舞されたのも其の一端かも知れない。某クラスの生徒数名が遊郭へ時々行くと云うので千曲川原へ引張り出して軟派征伐をやつたことなど即ち和魂の履き違えでもなかつたと思う。

戦争を境に万事が大きく一廻転した今、特に古いことを讃えるつもりではないが信州大学の一学部として殆んど県内から集まる生徒だけを収容して居る現状は我々が四十年前全国各地から集まる学生間の交際により全国に多くの知己を得て心広々とした気分で学生時代を送つた当時を回顧し何か一抹の寂しさを感ずるのは果して私だけでしようか

（北信生糸KK取締役）

◇　◇

上田雑感

繊維化学科三年　四茂野裕

上田の印象記を書けとの事大きいスペースを戴いたからには、一番奮起して、云い度い放題、書きたい放題をを並べ度いが、今更、上田は寒いと云つても始まらないだろうし、町の歴史から説き起すのも大げさだ、ここのところは一つ、上田に限らず、寒い国信州の現在を眺めて見度い。とは云い条、信州と云つても広うございます、松本と長野ではそこに住む人達の考え方なり人なりが随分違うだろうしそれを僕の様なやせ腕で、信州人として一束にされたら怒る人も無きにしもあらずだが、抗議を気にしていたのでは何も書けませんな、まあ、私が、入信以来、三年間、二つしかない目で見て来た範囲で物申すことにしたいと思いますが、何卒的外れの点は、みみずのたわごととお聞き、いやお読み流し下されば幸と思います。まあ、こちらとしては好機到来、いざ口に毒を含ませて、信州をなめ尽さんてなとこですかな。

前口上ばかり長くて本論に入らねば面白くない？　いや待ち給え、この前口上で散々油をそそいで置けばあとの効果がよい、これをお読みになる信州のお歴々、さあ覚悟はよろしいか？　まだ〳〵それでは駄目々々、そんな恰好じや怒つた時にお茶が引つくり返りますぞ……

さて皆さん、おはづけに舌鼓を打ちながらの長談義もさることながら、もうぼつ〳〵この辺でおみこしを上げても良い頃ではありませんかな？

そんなに炬燵にばかり噛り付いていたのでは第一健康に良くない、その中に頭ばかり大きくなつて永久に腰が立たなくなつたらどうしますか？何？夏には炬燵から出てるつて？そりやそうですよ、夏に炬燵をする人は、いくら雪国信州だとてそうたんとはないでしようからな、けれども僕の故郷広島より随分早いですな、第一ちよつと雨でも降つて気温が下ると、九月の中にもう炬燵ですからな。

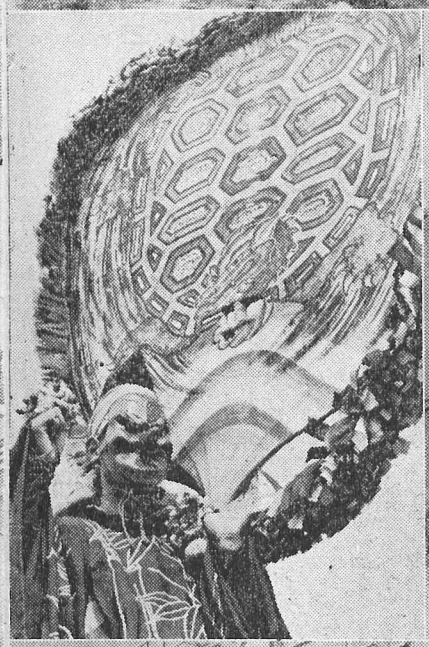
まあ、炬燵論を今はしている訳じやありませんから、それはいつ炬燵をしようと勝手として、どうです。貴方達の御先祖をつら〳〵と思い出して見て下さい。先ず大物として佐久間象山先生ですか？確かに学者ですな、この人は偉い、その血すじを引いた貴方々も確かに偉い、偉すぎますな、まあ会社で云えば、皆おえら方、三等社員は居ない様ですな、誰も、お茶など汲まないし、掃除をする人も居ない、それに他人の御気嫌取りなんぞとんでもない。

皆さん、それぞれ我が私生活なる椅子の中にふんぞり返つて居られるのじやありませんか？この立派な椅子におさまつた皆さんは、自分の生活を投げ出して、と云うよりもいわば、すじの通らない事は決してやらないてなことがおありの様ですな。立派な男気とでも云いますかな。

口角泡を飛ばしての議論は大変よろしい。物事を全て論理的に解決しようと云う熱意には僕も甚だ感服の外ありません。

しかし〳〵です。船頭多くして、船、山に登るの例えにもあります通り、皆さんが重役になつた積りで、皆、てんでに一通りの経営方針を以つて一歩もお譲りにならない。大変結構なことです。しかしそれでいざ経営方針会議の経過はと云いますと、たちまち喧々囂々、堂々めぐりの中に数時間を費し、どうやら結論が出たところを見ると、こはいかに、最初に某氏の提案した方針通り、そりや、数学や物理では確かに、ある一点からある一点に達するまでの、エネルギイの消費量はその間の課程に関係なく一定である

（八頁五下段へ）



写真説明

左上より

① 上田駅　上田の玄関、誰もが上田への第一歩に一度は必ず通つた処、二六年木造より御覧の通りのモダンな鉄筋モルタル造りに改装された。

② 上田駅の朝　ラッシュアワーの一時、駅前も大分広くなつた。

③ 駅前ビルの一部　駅前にも立派なビルが出来面目を一新。

④ 街の一部　ここは局前の四角、車歩道に分れていないので市内の交通危険地帯の一つ、然し市内到る処舗装され商店も大分立派になつた。

⑤ 旧本館　初雪に薄化粧した烏帽子岳を望み、何時に変らぬ吾らの学舎。

⑥ 学部風景　製糸科煙突の頂上より旧本館、新本館図書館の一部と千曲川を望む。早春の日ざしを受けた吾ら母校の姿。

⑦ 上田城　城下町の面影も段々薄れていくが、ここへ来ると厳然たる証拠がある。身売りした櫓も帰り現在は三つあり博物館となつている。

⑧ パツパ　古き伝統、先輩の遺産にます〳〵磨きがかかり。

⑨ 応援団長　運動会の応援団リレーにて各科団長の偉風堂々たるゴールイン。

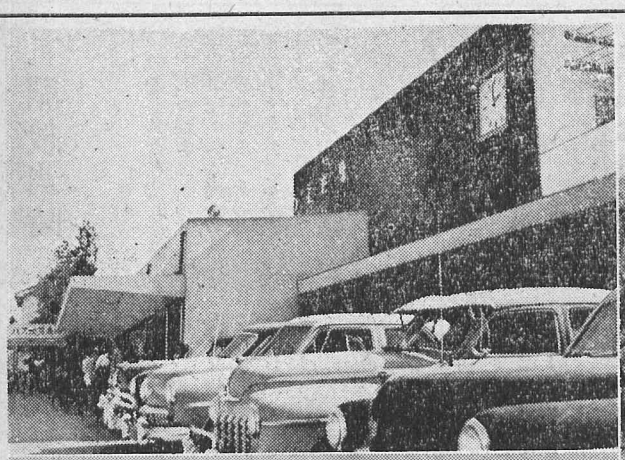
⑩ 須川湖　イヤ須川の池ホラ小牧山の中にある。最近観光地として売り出し夏はボートにバンガロー・キャンプ冬はスケートになか〳〵たいしたもの「定期バスの便あり」

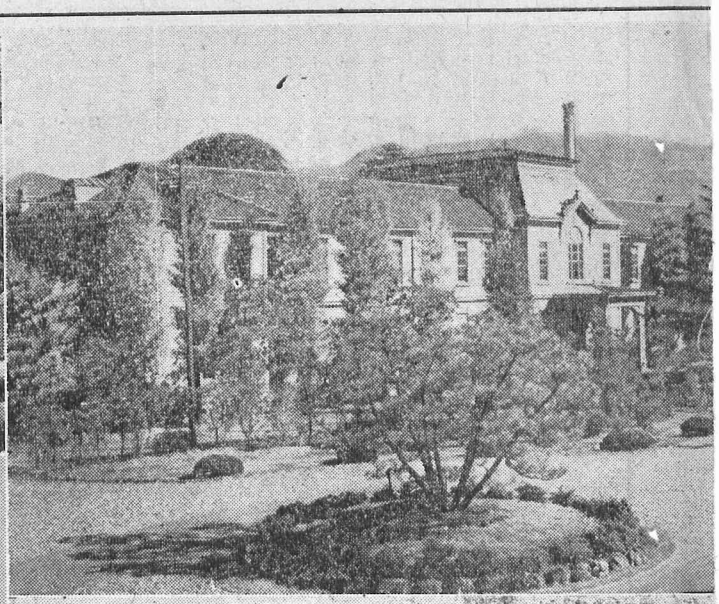
⑪ 上田獅子　大きな祭には今も出る。文化的遺産且名物の一つ。

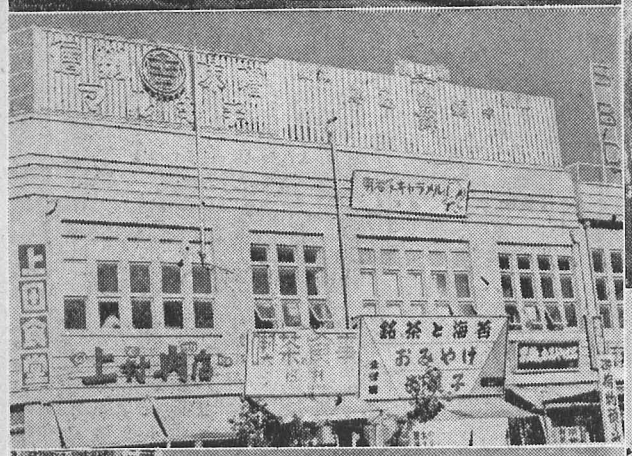
⑫ ささや　軍資金の屈いた時、試験の終つた時、○○チャンのお顔に接したくなつた時つい行きたくなつた処だがこの春新装相成りいささかイメージを破られた方もあると思いますがまあ上田へお出の節は……。

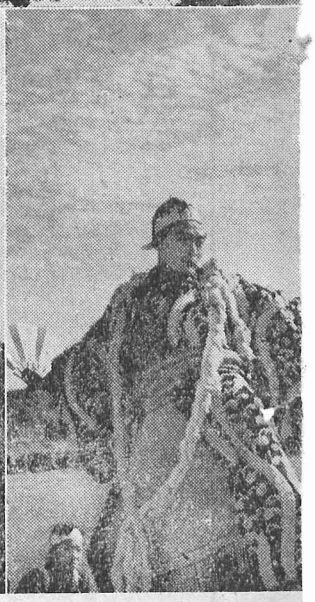
⑬ 上田映劇　週期的に必ず通つた処、講義や実験の時間にサボつて行つたのは誰ですか。新装成つて昔とは大分様子が変りました。他に映画館は五館ある。

⑭ 上田郵便局　学生々活で是非必要なもの、それは……を受取りに時々御厄介になつた。二九年鉄筋コンクリート造りのモダンな姿に新装し御覧の如し。






上新商店
銘茶と海苔
おみやげ



SHELL
十軒店
食品三豊
タカハシ

開校当時の上田の思い出

蚕二　戸倉八峰

○前書—去る六月於浜松市日本学術会議御出席の途次蒲生学兄拙宅へ御入来一夜雑談に花を咲かせた。その時拙稿を何処かえ紹介するから投稿せよと云うので信濃毎日新聞へでも随筆式に出せと云うかと思つたら稿料無料の会報へとの申入、何処までも閑人はロハに相場は決つているかと自笑数刻哉。

○上田への私の因縁—自分は中学で英、歴、地、国漢等普通科が好きで、数学、物理、化学等は大嫌。友人と相謀つて将来弁護士を志したが家業上親父に叱られて否、応なしに蚕の道へ。西ヶ原嫌いの父の指金で上田へ因縁付けとなり明治四十五年春盛りの花の郷里遠州袋井を立つて信濃入り、上田町の駅に降りて花一輪も目に入らぬので「花無輪〳〵の寒さ哉」であつた。静岡出身の北島先生の宅の第一夜が因縁上田三年の第一歩。

○因縁の上田生活—志望に外れた道に入つた心境は淋しくも冷哲只三年を過す一途のみと観念して平凡に終始したと今日告白する。されど浅間山あり、千曲川あり、別所あり旧蹟あり、平凡の中にも学費十七円五十銭也母の送金で呼吸し排泄した三年の短人生にも面白かりし思出も多々なしとせず。

○上田町のその頃—当時は上田は町で馬鹿の一つ覚え町長石田四万太氏であつた。大した名町ではないとしても云わば古色滄然とした古都、歴史の教える名将の居城は公園となつていた。流るる千曲川は郷里の天竜川、大井川に比すべくもない詩情豊かな九十九折の名流この川原に乱れ咲く月見草、夏夜の散歩で眺めては三流の文学青年（倉沢大兄の如き）に成りかかる。その頃であつた若かりし学生久米正雄の紀行文「山と別れ、河と別れ、そうして月見草と別れ……」の名文の新聞記事を亡友大石デカが読み上げるのを聞いて一寸感傷的になつた古事も懐い出の一ツ。一寸横道へ外れたが、松尾町か海野町の肉屋の味（その頃この家の美貌の娘が今別所の柏屋別荘のマダムなる事を昨年五月別所へ行つた時倉沢大兄から内所話に承つた。）入船のカツレツ、一皿十銭など美味かつたなど追想の一つ二つ。松尾町のある果物店で腐りかかつた林檎を特売して貰つて半分捨ててアト食べる要領家も沢山居た。堀本君など先覚者第一号。かくせねば月十七円五十銭の送金では赤字が出るので皮肉の策か腐林檎の活法か。　一寸今の学生の出来ぬ所か。

○当時の蚕専—明治四十五年入学は二回生で学校は当時新設早々、周囲の校境も淋々境杭も区然たらず、草ボー〳〵その上に厳然と校舎其他新築されて科は主として養蚕製糸の二科丈実習は主として桑園新設のため天地返し、之には参つた。一回生先輩の指導もよい事もあり、悪い事もあつて天地返し作業中曰く「先方半キロに低気圧襲来警報」とドナルから見ると天気はよし風もなし豈図らんや女学生数人が来る丈、かかる低気圧を見ていて天地返しがよく出来る筈なしと自認した訳だ。

　教授連も新進気分の若手、田中勝木其他大勢と云う所。然し中には新築論語大人など老境に近い真面目な村夫子然たる方もなしとせず、この人県人会の宴席で酒気が廻つて蔭芸の御自慢は「ダンゴじやいけないモチ上げよ」と手振り腰振り奇妙な足取りは絶賛され矢張り酒は百薬の薬哉。又分けても立派な花道姿とでも云うべきは針塚校長の登校態度で一分のスキもない足取り満点、大人の風格一段と光り、玄関内へ消える迄門番は不動の姿勢、軍閥花やかなりし頃の閑院宮元帥の登庁にさも似たりと謂うべし。

○一生涯で一度吐いた酒—入学早々一回生主催の歓迎会があつて吾々も某料亭の酒席へ始めて出た。十八才の若輩「これが酒呑み会か」　と恐る〳〵口にして何杯か覚えもないが苦い顔をして飲んだとする。終にフラ〳〵になつて寮へ帰つてから苦しく吐いて終つて一生禁酒となつたとせば大変（十）となつたろうが、アトで記述するが交友の指導でコリ〳〵にならず、四十年間縁が切れず、失敗、叱言等々で（二）で今生を了るであろう。だが当初一回丈吐いたのみで今日迄一度も吐かぬは何とした事だろう。

○交友あの人、この人—交友を結だ友人には今日迄思出の人々沢山あるが別にケンカ別れをした友もなし皆善人のみであつた。その内身近かの人で故人になつた方も可也ある北沢、高島、小笠原、小川（敬）朝長の諸氏、今春死去された北沢君など別な思出が在学当時あつて会合で芸をやつたらと云えば必ずビワ桜狩、一同それ棚引き始つたと笑声湧くのであつた。死亡通知に接したので弔句

悼たましや
霞すみ棚引く
術もなし（八峰閑人詠）

因みに二回生故人十三名生存者二十余名と云つた所だろし生存者中には仲々の一騎当千の士、名論卓見の雄、多士済々と控えて霞を食い、濁酒を呑んで生きて居るらしく一度一堂に会して一杯やつたら面白かろう。誰か主催者の志願者なきや。

○酒と私と某友人—只一つ善意の事実談を云うと、酒に関して指導者があつた。事の初まりは佐藤良太郎兄也、名は良太郎なれど実は悪太郎と云うべく、悪い味を教えてくれたものだ。上田町内の或る豆腐店の離れの二階に鎮座まし〳〵て居て、冬の夜など寒冷を耐えて訪ねると、さし湯豆腐で一杯と来る。又一杯で味を教えてくれ、今日迄の習性とはなつたものとしてこの文中色々の意味で敬意を表して置く。

○開校当時の冬スポーツ—今でこそスポーツ全盛何でも彼でもスポーツ、殊に終戦後は音楽とスポーツは日本の民主主義の代表の様な進み方で大衆化されている。明治末期、大正当初頃と雖も、一通りスポーツは皆あつたが、スキーは初歩時代で一部の人の試練的程度スケートは可也盛んで吾人県外から行つた者は珍しいので上田の附近の池で滑つたり転げたり、微苦笑物であつた。野球は蚕専としては大した事でなく、庭球は専ら流行して試合などやつたものだつた。その外山登りは仲々盛んで各地の山へ登つたものだつた。

○茄子菜恋—開校当時上田と云う田舎町へ日本各地から志を立てて、修学に集つた青年学徒、門前市をなすと迄は云えなかつたが、そこで、譬え「オレがナー」の地方語ナマリの言葉を使う女学生（前記低気圧）と雖も青春の女性「縞のオーバーの程のよさ」と勝木先生が嫌味を吐いた蚕専学生に横目を与え、一脈相通じて当時可也の恋愛物語が底流的に潜在し修善寺物語以上に喧かつた時相もあつたと聞く、又かかる方面に超然とした人種もあり、いつの時代にも類似点はあるものらしい。かかる奇しき因縁が取り持つて結構な結果を聴取したカツプルもあつたと聞いた。之を批判するのではないが、学徒は本命を守るに忠実而も須らく恬淡水の如くあれ、スポーツに、趣味に又は特別な余技に、何なりと心の掃気の吐き口を求めて常に気分の快晴白日——これが老青年の私の一針プツリ、なすな恋と刺して擱筆します。（三〇、九、三〇）（会社重役）

（五頁より）

なんてことは数学の嫌いな僕でも分りますが、これをすぐ現実に適用された日にはたまりませんな、兎に角、他人の云うことが正しいと分つていても、どうしてもひとこと文句を付けないと承知出来ないとんでもないことです。教育県で全国に勇名をはせている長野県の皆さん、貴方々は頭が良すぎる故に物事を複雑にしてしまう様ですね。

　そりや、炬燵の中での長談義ですぐ結論が出てしまつては、あとは、手持無沙汰をかこつ破目になりますから、出来る丈話を長引かせて、時間を潰すことも大切な社交法かも知れませんが、それにわざわいされて、大切な事件の解決や緊急を要する仕事の際にあいも変らず、この議論癖が出て来て、こと更に問題を複雑にしてしまう様ですな。

この様な事は長野県の地理的環境にもよるものかも知れませんな、東に近代的センスの尖端を行く都、東京を控え、知的な面に於て十二分にその影響を受ける一方、寒い寒い冬の間じつと家に引つ込んで話し合われる機会の多い皆さんが、先程申しました様な、好ましからぬ癖を持たれる様になることも無理からぬ事かも知れません。しかし、物事を早く片付けることも又、大切ではないでしようかな？この様な面では多少、フアツシズム的な考え方の様で排斥されそうですが、強引に押し切つて行く人に、その女房役として物事のスムースな解決に陰の力を貸す心掛も又大切である様な気がしますが如何？自分をある程度迄下げる事は軽蔑されそうで案外大切な事ではないでしようかな、良くある事業をやるにしても、結局腕をふるつて上に立つ人は関西人で、信州人は、それ以上に立派な頭脳を持つているにも拘らず、他との折合がう

（次頁五段へ）

我が『断腸の記』

糸八　鈴木教晋

腸を切つて、書かず、談らず、の三年間だつた。末広厳ちやんが、『断腸の記』を書いて間もなく亡くなられたのに、恐れをなしたためではない。唯何となく、ものうかつただけだ。

×　×

胃腸は、子供の時から弱かつた。下痢は、数年前からだん〱ひどくなつたが、それでも朝起きた時と、夜寝る直前の二回だけだつた。多忙のため下痢する時間のなかつたことが、習慣性になつたのだ。神戸綾部東京にそれ〴〵親切な主治医（?）があつて一週間目位に診て貰い、下痢止めの服薬や注射を続けたが些かの効果もない、レントゲン検査や、検便も、定期的にやつたが、原因は不明だつた「せめて一週間入院して下さい。必ず根源をつきとめますから」と言われながら、その時間が無かつた。

×　×

労組との折衝、金融機関や本社（郡是製糸）との交渉などで、徹夜が幾日も続き、文字通りへと〱に疲れた敗残の身を、中田太郎さんに附添われて、病院のベツトに横たえたのが、一月十八日の午後だつた。それから一週間、あらゆる診察検出にも拘らず、病源は不明のまま、依然として下痢が続く。二週間経つても見当すらつかない。『癌ではないか』と言う私の疑問に対しても、便に潜血反応がない体重が減らない（何年間もの記録がある）貧血の徴候もない、顔色もいい、など寧ろこれを否定する資料が多い。引続いてのレントゲン所見は、大腸までは絶対に異状なしだが、直腸から特殊の液体が滲出する。と言う結果が出た。次で肛門から約十糎の部位に癌腫のあることが、直腸鏡で検出された。二月六日のことだ。

×　×

癌腫の表面は、まだ破れていない、だから潜血反応はない。直腸癌の初期は、栄養障害が尠い、だから体重も減らない。発生後大体一年以内で完全に除去し得る、と言う。「数年間の下痢は?」と聞えば「癌の前駆症だ」と、簡単に答える。これで多年の間最も恐れていた結果が、出た訳だ。然し初期だと言うが、あれだけ長い年月苦しんだ下痢だ。初期だと言う直腸の癌腫は、他から転移したものに違いない。その根源は切開して手がつけられない、と言うに決つている。と心秘かに覚悟は、出来たつもりでいた。東京から飛んで来た妻も、すつかり覚悟して紋服を持参したとは、後で聞いた。

×　×

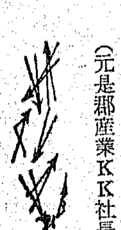
二月十七日が第一回の手術だ。開腹して切除の可否を診断し、可能の場合にのみ、人工肛門を作つて、次の本格的手術に備えると言う。たとえ不可能の場合でも、患者には『除去した』と言うのが、現代医術の常套手段だ。だから『ごまかされずに真実を見て呉れ』と、中田太郎氏を立会人に頼んだ。開腹後五人の先生方が、ドイツ語で協議している最中、中田氏は脳貧血を起し、看護婦に支えられて、室外に出たことを知つた。代りに林秀門氏が右手を支えて呉れた。『駄目かな?』と思つた瞬間、左手を支えて、脈搏を診て居た看護婦が、強く三回ばかり私の手を握つて『大丈夫よ』と合図して呉れた。

癌腫てう死の宣告に手術台の戦く心じつと抑えつ手術台のメスを待ち居る一瞬にふと生涯のことども思う手術中脈見てありし看護婦が『平静です』とそつとささやく五時間の手術も済んでシーツ除けばにんまり笑うゆとりもありき（当時の即詠）

×　×

その後三月二日と五月四日に、再度手術し、K大外科部長A博士も、完全除去を確言し、六月五日退院、企劃課長O君と看護婦Hさんとに送られて、無事帰宅した。その後は大体順調に経過したが、人工肛門に括約筋が無いため、外出には不便で、引籠り勝ちの静養を続けていた。ところが昨年始め頃から、空腹は感ずるが、吐気があつて食べられない、便に潜血反応がある貧血がひどく、顔色蒼白、体重が減る、腰や脊骨が痛い、下痢がどうしても止まらない歩行が困難だ、視力が弱つて新聞も読めない、日記も書けない、等々の容態だ。医師が『貴方は前科者だから遠慮なく言うが、これア癌研行きですぞ』と言う。部位を聞くと『肝臓が腫れている』とのこと、それでは今度こそ致命傷だ。といろ〱身辺の整理を始め、偶々見舞に来て下さつた石倉先生の、『出来るだけ整理し、落着いて静かに逝け』と言うお言葉も、素直に聞けた。その後故和田先生の奥様が、伝い聞かれて、癌を注射で治癒すると言うH博士を紹介して下さつた。甚だ気が進まなかつたが、家族も極力すすめるので診察を受けたところ、反応はプラス、肝臓らしいと言われ、その日から五日目毎に注射を続け、八十回で一応中止している。私を東京に送る時、途中特急停車駅の有名病院を調べ、異変があつたら、即座に入院させる心構えだつたO君は、その年の十二月下旬私と同じ病室、同じ看護婦、同じ先生の執刀で胃癌を手術したが、既に手遅れで、丁度一ヶ月目に逝去し、又私が注射を始めた頃、肝臓癌と聞いた早川先生、坂路善一君の逝去を思うと、転々感無量と言うところか。

（元是郡産業KK社長）



（八頁より）

まく行かず孤立する事がままあるとか聞きますし、戦時中に於ても大将になれる丈の貫禄も実質もあるにも拘らずそれ以下に止まつた人達の例を貴方々でも御存じかと思います。何も僕はここで立身出世主義を唱えている訳ではありませんが、もつと協調性を持つて欲しいと思いますな。

僕自身にしても、これは僕が今迄に接したごく一部の長野県の方々に限られるものですが、その人達に対して感じた事を卒直に申し上げますと貴方々は、机上に於ての、理論斗争の相手としては、この上ない好敵手なのですが、仕事を一緒にやるには、にが手の人達ですな、或人に云わせると信州人はエゴイストだとも云います。しかし、このエゴイストなる言葉そのものもあいまいなもので下手に使うと、誤解されるおそれがありますので、ここでは使わぬことに致しますが……。さてとんでもないお喋りを長々と致し、皆さんの悪口の云い放しになりそうなので、この辺りで話題を変えると致しましようかな。編集氏の方のお話では、そもそもこの僕が書いて参りました。悪口じみた悪文の題目は〃上田の印象〃てなものにして欲しいとの事ですから、ここいらで一つ、客観的に上田を一わたり眺めると致しましようかな。

まあこれは上田に限らず、長野でも、小諸でもそうですが〃坂の街〃が、僕の目には非常に面白く、めずらしいものに映りました。

確かに道が坂になつて居りますと、その上り下り丈でも体力を余分に消耗して、健康上非常に好ましからぬ環境なのですが、矢張り人間は、全ての自然現象をロマンチツクに考えたがる習性を持つて居る様でして、僕も御多聞に洩れずこの、考えれば奇好な習性の持主の一人なのです。何しろ、今迄、平坦な道で、人間のまずい顔をまともに眺めて来た僕としては、坂の道を歩きながら、時には上から、或は下から、見下げ、見上げる人間の姿に、又、今迄にない変化がありまして、真正面からまともに見る顔とは又違つたおもむきがある為、もう一つ、斜に見た人間の顔に就いて新らしい美的標準を設ける事を痛感致した次第です。又この上田は、全然これと云つて特色の無い町ですな、需要と供給が適当にバランスが取れ、中層都市の名にふさわしく感じますな。特色の無いことが一つの特色かも知れませんが、町を歩く人も、馬鹿に派手な人はなく、又、馬鹿に田舎じみても居ず、いやはや全く何も申し上げることはありませんな。

只、これも上田丈ではありませんが確かに千曲川に架つている橋丈は、立派なものです交通量に比して非常に立派な橋が所々方々に見られますな、千曲川の名に恥じないつもりかも知れませんが、いずれにしろ、嬉しいことですな。

以上、とんでもない、まとまりのないことを述べましてはなはだ恐縮に存じますが、見たまま、聞いたまま、お喋りさせて戴きました。ではおやすみなすつて、ありがとー

（広島県出身）

清水寛君（蚕廿九）をいたむ

中島英男

清水寛君は二十四年春以来丸六箇年一進一退の斗病生活を続けられたが、遂にこの三月十五日早朝三十五年の生涯を閉じられた。長い年月再起を期してあれ程真剣な病床生活を送られ挺身病魔と斗われたのに、その甲斐もなくついに不帰の客となつてしまわれた。御遺族の皆様は勿論我等級友にとつても、痛恨の極みである。鬼籍に入りし級友の、たださえ多きを数えるに今又ここに又一人の友を失う人生の無常、運命の苛酷を嘆ずるのは僕のみではあるまい。二十四年一月戸倉で催した同級会に出席した君は未だ元気であられた。そしてあの時の清水君が我々の大部分にとつて最後の清水君になつた。君はあれから二月を出ずして風邪をひかれ、それがもとでどつと病床につかれてしまわれたのである。君は学生時代から頑健という方ではなく二年生の時長欠され、卒業後も体力を養われる意味で村の国民学校に勤められたのであつた。その後丸子女学校に転ぜられ実業方面を受持ち、戦時中の事とて開墾作業その他無理が多く再び病に倒られた。蚕試上田支場の方へ出られたのはこの折健康を恢復されてからであつた。そして終戦直後の混乱期を責任感の強い君は無理に無理を重ねられたのである。君の発病は決して偶然ではなかつた。

発病以来高熱が続き、君の体力は急速に衰え、そのまま六年の間一進一退を続けられたのである。この間御家族殊に母君の手篤い御看護は思わず涙を催させる程であつた。その甲斐あつてか昨年秋より病状安定し春には立つて歩いてみようと思うなどもらされる程になられた。若し盲腸炎などという余病が君を見舞わなければ君は漸次元気を取戻しておられたかも知れぬ。昨年暮君は衰えた体をふるつて盲腸の手術を受けられた。そしてそれが君の致命傷となつて了つた。二月末危篤に陥入られ、そのまま遂に立たず、清水寛君は清純蓮の花のごとき短かい一生をおえられたのである。時に昭和三十年三月十五日午前九時。うす曇りの空から春先の陽がのぞく静かな朝であつた。

病床生活六箇年、君は君なりきに煩悶の限りをつくされたに相違ない。しかし何時会つて見ても君は悟道に入つた高僧の様な心境であられた。自然、芸術、人生、政治、経済、話題は四方山に及んだ。そして「何時、死が訪れて来てもしずかに手を合わせられる」そう云つておられた。

小さなメモを枕元に置かれ短歌、俳句、詩を米粒の様な字できつしりと書き込まれておられた。君は実に病床の詩人であつた。「元気になりたい」切実にそう思われていたであろう。しかし「外へ出てみたい」と漏らされたことはなかつた。秋の空が素晴らしいと云うと「そうだろうな」と答えられるだけであつた。あきらめに徹し切られた日常であつたのであろう。体は衰えておられたが、時勢に対する批判は痛烈であつた。恐らく君の精神力は危篤におちいるまで確然とし続けていたと思う。死の前日君は御家族の皆様に長年の看護の礼を心からのべられ、訣別なされたそうである。そして平静な全く君にふさわしいおだやかな最後であられたと云う。

清水君「善良なよき人」この言葉が君程ぴつたりあてはまる人はあるまいと思う。君は実によき魂を持つた人であつた。すべての人に善意をもつた。思いやりのある君であつた。君の生活は清純そのものので、花は蕾のままで散つて行つたのであろう。職場にあつてはよき社会人、級友にはよき友、家庭にあつてはよき子、よき兄、又将来よき夫よき父となる可能性を離よりも豊富に持つておられたのに、果敢なくなつてしまわれた。しかし係累を残さなかつたのは君にとつてはせめてもの心休まりであつたかもしれぬ。

丸六年間、長い長い間、君は高熱にあえぎ乍らよく病と斗われた。瞑目された君を前にして滂沱たる涙をこらえ「よく、よく斗つた清水君」と心の中に叫ばずにはいられなかつた。君は最後の力をつくして、つい倒れたのである。

葬儀の日は物凄い嵐で砂塵は天を捲き、雨は車軸の如く大地をたたき、疾風は恐ろしいうなりを立てて、樹々を揺り動かした。それは恰かも天地が君の夭折を慟哭しているかのようであつた。

今君は幽玄の静寂に還元して虚空蔵山の麓、老松の群立つおくつきにしずかに眠つておられる。朝、夕の虫の音降るが如き彼のおくつき、あんなにも自然を愛された君は眠下に拡がる緑の田園を、今は何物にも心煩わされず心ゆくばかり見入つておられることであろう。生前よく嘆された田圃の稲の今年の稔りは倒れんばかり、青空のもと君が愛した農人達が今日も野良にそしんでいる。故人の御冥福を心からお祈りして筆を擱く次第である。

特別活動資金の募集について

先の支会長会議で決定した特別活動資金募集は各支会から御推薦下さつた有力候補者を筆頭に全会員から御寄附を頂き、広い意味に於ける就職斡旋を展開し、久しく沈滞していた本会に活を入れ、もつて同窓精神昂揚の一助とするため本部に於てより〳〵協議して参りました処、五年後にせまつた母校五十周年記念行事に参画するならば今日より或る程度の目安を樹て準備せねばならないことが感ぜられ寄附募集の二重の煩と冗費を省く意味で来る総会の議を経ねばならないが特別活動資金募集もこの記念行事の一として記念事業に折込んで、その外に考えられる、記念講演会物故者慰霊、功労者表彰等を含めた記念式典の費用と母校五十周年史編纂に要する費用とともに三者を一緒に募集することが最も当を得た行方と考えられることになりました。

その後相当の期間を経過した現在未だ特別活動資金募集が遅れているのは以上の理由によるもので既に数名の有力者からの醵金もありますが何卒悪しからず御諒承をお願いいたします。

未納会費納入の恩典

従来支部単位に支部幹事の手を煩わして未納会費の納入を願い、その納入額の五割をその支部に還元交付しておりますがこの五割還元の恩典は本年度（来年三月末日迄）内でありますのでお忘れなく期限内に納入を果されるようお願いします。

原稿募集

全国各地で御活躍の同窓生諸兄姉、日常雑記随想、研究評論、クラス連絡記等、又は千曲会への御意見御批判等、何でもどん〳〵御投稿下さい。

投稿者には記念品を差げることになりました。

編集部

千曲會名簿發行

既に会報上で御知らせ且御願いしておきました会員名簿がこの十七日に発行の運びとなります。予約して下さつた各位にはおくれたことを深くお詫びします。前号の予告を御覧の上御購入下さる様御願いします。

記

一、頒布価格　金弐百五拾円（但送料共）

一、代金の現金は手紙に同封しても送れますから御利用願います。

一、宛名は千曲会名簿編集部として下さい。

千曲会名簿編集部

会費領収

（十月一日現在）

入会金納入者

甲村　昭子（別糸一）
浅沼　次男（紡大二）
上原　光雄（〃　一）

昭和三十年度会費

中野　国雄（糸三六）
高見沢良夫（化　一）
宮島　利男（糸大二）
甲村　昭子（別糸一）
岩田久太夫（糸三三）
町田　博（紡二一）
土屋　貢一（化　二）
柳沢千代茂（〃　二）
松尾　介石（〃　三）
宮本　治男（〃　八）
西沢　寛夫（〃　七）

（一一頁へ）

（一〇頁より）
馬場　愼（〃七）
宮島　利男（糸大二）
石井　貞司（糸三八）
柳沢　大平（紡一六）
吉田　信伍（蚕三三）
湯沢　重敬（糸一四）
都築　清治（蚕二〇）
竹内　方栄（紡九）
尾沢　敏夫（糸二二）
米村　正義（〃二六）
田代　毅（〃二七）
佐野　浩正（〃三一）
内田　浩（紡二〇）
中島　茂（蚕一一）
河野　芳春（〃一八）
黒木　農夫（〃七）
太田愼一郎（〃六）
椎谷　藤良（紡七）
江口　喜清（蚕二二）
白根　典昭（〃三七）
松崎　武雄（紡一〇）
相野田文雄（糸三一）
塚本　優（蚕二一）
松本　昇（化七）
藤島　一千（紡一二）
辻本　豊（化四）
松村　恵一（糸二〇）
小泉　郁雄（紡専）
三瓶帶三郎（蚕一八）
高品喜一郎（紡四）
加藤　敏雄（〃二五）
鈴木　茂（蚕二三）
野島　忠義（糸二七）
上田　正三（紡一五）
荻原　博文（〃二七）
山田　良人（糸一八）
遠藤　文平（〃一）
鳥羽　輝男（紡専）
蒲生　後興（蚕一）
竹田　寛（〃二五）
田中　一行（〃三五）
西山　久雄（〃三六）
山口定次郎（〃一二）
清水　猛（〃三一）
田中　茂光（農二）
田口　亮平（蚕一七）
西村　善次（〃三八）
松尾　卓見（〃二八）
桜井　善雄（〃三五）
古平　福紀（〃二九）
林　真三（糸三）
青沼　茂（〃三三）
荻原　清治（〃一二）
白井　美明（〃二〇）
石川　博（〃三二）
野口新太郎（紡二）
小林　尚一（〃八）
土屋　幾雄（〃二六）
美濃津利正（紡専）
小山　定（糸別二）
松島　房江（紡大二）
須田　圭二（蚕二）
坂口　育三（〃二二）
北条　舒正（化一）
今井甲子男（〃四）
池田　忠夫（〃六）
清水　周（〃九）
阿久津伊平（紡一七）
遠藤　恒久（〃二〇）
三石　豊（化九）
矢澤沢清光（化大一）
倉沢　美徳（蚕二）
町田　博（〃二一）
関　博夫（〃二三）
押金　健吾（〃三六）
柳沢　幸男（農四）
八木　誠政（蚕三）
小山　長雄（〃二六）
山崎　睿録（糸一九）
中原　武（蚕三三）
中島　遥（糸一六）
一之瀬匡興（紡二六）
堀内　波（旧教）
柳沢　連子（教六）
上原　光雄（紡大一）
柿崎　泰彦（蚕二九）
黒田誠一郎（糸八）
上条　敬典（蚕大二）
笠原　正巳（糸一五）
片山　次夫（蚕一五）
笠原　四郎（〃一八）
宮沢　達彦（糸三五）
荒井　友司（糸三八）
西沢かほる（教養一一）
西沢　政人（蚕二三）
小林　利弘（〃三五）
柳原　卓也（別蚕コース一）
久保田ハル（教六）
長岡　節子（〃八）
村上けさ江（教八）
小林　茂（蚕二六）
木内　俊一（〃三三）
茅野　功（〃一九）
横沢　正雄（蚕二三）
安達　弘雄（別蚕コース一）
塚田　光行（〃二）
関　峰太（〃四）
柳沢　弥（糸大三）
倉沢　正利（蚕三六）
原田　種亀（〃九）
東条　功（〃三八）
中村　輝子（教五）
松崎　守夫（農五）
倉島富士子（別糸三）
高橋　俊男（糸三五）
関　文夫（〃大二）
松岡　竜雄（化六）
坂本　政雄（紡七）
間山　義道（蚕一三）
今井　喜八（〃二九）
大塚　重蔵（糸八）
倉橋　琢而（〃一〇）
森西　康充（〃一二）
井立喜三郎（〃一三）
叶沢　純一（〃一七）
望月　弘（〃一九）
神崎　閉一（〃二二）
本庄　昇（〃二四）
土屋　芳樹（〃二七）
金子　保夫（〃三六）
小山　彰一（〃三六）
丸田　節夫（〃三八）
田中　実（糸大一）
田中　重臣（糸大二）
岸本　礼一（紡二四）
佐藤　正明（〃二八）
石坂　茂（農三）
三村大八郎（糸三二）
倉石　和夫（化大三）

昭和三十、三十一年度会費

青木　幹夫（蚕二二）

昭和三十～三十三年度会費

荻原　喜夫（化九）

昭和二十九年度会費

中野　国雄（糸三六）
高見沢良夫（化一）
市川　敏三（蚕一八）
吉田　信伍（蚕二三）
内田　浩（紡二〇）
塚本　優（蚕二一）
巣山　朔郎（化七）
辻本　豊（〃四）
中田　太郎（蚕七）
永田　平（〃八）
山崎　寿（蚕一四）
藤本衛佐雄（〃一六）
中村　驥（〃一六）
倉沢二三（〃一七）
河野　太郎（〃二〇）
赤羽　是寿（〃一九）
石田　三雄（〃二四）
塚田　信二（〃二五）
牧野　嘉雄（〃三一）
島田猛一郎（〃三一）
竹井　章（蚕三七）
一志　蔵人（糸一）
小岩井桂二（〃三）
宮入　誠一（糸五）
土屋茂一郎（糸九）
西口勇三郎（糸一六）
平沢和可男（〃二四）
三村大八郎（〃三二）
堀米　吉美（〃三五）
西沢　秀夫（〃三六）
小池　良介（〃三六）
清水　勝郎（糸三七）
北村　誠志（糸大一）
小沢　実（〃一）
高木　信雄（紡一五）
永井　千治（紡一七）
上原　釣也（〃二三）
原　泰直（〃三〇）
加藤秀次郎（化一）
百瀬　保人（化大一）
芹沢　暢明（農一）
丸山　宣重（〃三）
中村　栄司（紡専）
丸山　はる（旧教）
中沢　幸代（教四）
堀之内虎男（糸別一）
松村　昌三（〃三）
山村　洋介（糸二二）
塩田秀三郎（〃三一）
花房　清一（紡一一）
高岡　米治（〃一九）

編集後記

十年一昔と云うが年月の経つのは早いもので終戦も一昔前と相成った。誰もがこの終戦が長い人生での一エポックとなって一線が劃されていることと思う。インフレだ食糧難だと生活苦を訴える反面、ジャズだパチンコだストリップだとやけっぱちな享楽にその日〳〵を動物的に自分だけの事を考えて切り抜け他人の事など考える余裕のない生活……全部の人がこうでなくともこれに似た気持は誰もが味わった事だろう。

有難いことに今年は六〇年ぶりの豊作との事、何となく世の中が落着いた明るい感じを与えている。人間、生活に余裕が出てくると他人の事もゆっくり考えられるもので長い間二つに割れていた社会党も一本になり保守合同も盛に論議されているようだ。

さて吾々もここで一つ目を自分の仲間の処へ向けて同窓会に思いを走らせて見よう。曰く、活動が不活潑だ、会費の集りが悪い、同窓同志の連絡がうまくとれていない、老人達のグループで若い卒業生は会そのものに魅力を感じない、はては同窓会不必要論迄飛び出す始末、これでは立派な型態と組織を持ち天下に誇る吾が母校を卒業した吾々が学校に関する限りジプシーと同じ存在だ。

現在の吾々にとつて同窓会精神の昂揚、相互の親密互助活動強化等々問題は山積しているが互の理解と自覚により一つ〳〵よりよく解決し前進して行きたい。

最後に本号の為に特別御寄稿下され紙面を飾つて下さつた方々に御礼申し上げると共に他の皆々様にも御投稿或は御批判を載き益々立派なものにしていくよう切望する次第です。

向冷の折御健康に留意あらんことを祈ります。（今井記）

編集部総務　田口　亮平　小山　長雄
編集部員　古平　福紀　石川　博　中原　武　土屋　幾雄　田中　茂光　西村　善次　木藤　半平　今井甲子男